
ONE PIECE ~ 第二の暴君 ~

次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ONE PIECE 第二の暴君

【コード】

N1232N

【作者名】

次郎

【あらすじ】

主人公ジョーカーがローグタウンでエースと出会い海賊になって高みを目指す話です。

エースとジョーカー（前書き）

文章下手で申し訳ないです

エースとジョーカー

始まりと終わりの町ローグタウンで一人の若者が海兵に捕まっていた。

彼の名はクラウス・D・ジョーカー。町の酒場の用心棒だ。

なぜ彼が捕まっているかというと、一時間ほど前、彼の店に海賊の団がやってきたのだ。彼は海賊たちを追い出すために大暴れし、店を含む五つの建物を破壊したのだ。彼が建物を破壊するのはいつものことだが、今回はさすがにやりすぎたということもあり逮捕されることとなった。

ジョーカーは海兵に訊ねた。

「海賊を始末してやったのになぜおれが捕まるんだ？」

前を先行する海兵が振り返り答えた。

「おまえがよけいなマネをして町を壊すからだ。海賊を捕まえるのは我々の仕事だ」

「あんたらみたいになへっばこ海兵に海賊を捕まえられるのかい？
知らなかったよ」

海兵はその言葉に顔を真っ赤にして怒り、拳を握りしめ、いまもジョーカーに殴りかかろうとしていた。だがその時、後ろから声をかけられた。

ジョーカーが振り返ると、帽子を深く被った男が立っていた。

「何者だ！？」

男は海兵の問いに答えず、ジョーカーに歩み寄り、左手で帽子を押し上げ、右手を差し出した。

「おれはポートガス・D・エース。突然だがおれと一緒に海賊をやるらないか？ あんたみたいな男が仲間欲しかったんだ」

エースの申し出に一同は驚き目を丸くした。だがジョーカーはすぐに笑顔になった。海兵の目の前で海賊に勧誘するという行動をとったエースを気に入ったのだ。

「おれはクラウド・D・ジョーカーだ。あんた気に入ってたぜ、あんなの申し出喜んで受けさせてもらう」

ジョーカーはエースの手を取り、がっちりと握手を交わした。

「うごくな！」

海兵の一人がジョーカーに剣を向けている。

だが、二人は海兵を一瞥するだけで気にした様子もなく港へ向け歩き始めていた。

その態度に怒った海兵は剣を振り上げジョーカーに斬りつけるが、次の瞬間には宙を舞っていた。ジョーカーの蹴りを腹に受けていたのだ。そして勢いよく地面に叩きつけられ、激痛が走り仲間に助けを求めようとしたが、そちらはすでにエースにやられていた。

ジョーカーは海兵の懐から鍵を取り出し、自らの手錠を外した。

そしてまた二人は何事もなかったかのように、港へと歩みを進めた。

いざグランドライン

港についたジョーカーは停泊中の船を見回しエースの船を探したが、いくら探しても海賊船らしき船は見あたらなかった。

「おまえの船はどこだ？」

そう言つてエースを見やると彼は港に繋がれた小舟のロープをほどいていた。

「これだよ」

ジョーカーはそんなわけないと少し考えた。グランドラインを渡るのにこんな小舟で行けるわけがない、この船は沖に停泊させている船に戻るためのものだと言論を出し、エースに聞いた。

「沖にデカイ船があるんだよな？」

「ないよ」

ジョーカーは頭を抱えた。どう考えてもむちゃくちゃだ。これではグランドラインにたどり着けるかどうかもあやしいものだ。

「これじゃむりだぜ。他の船を探そう」

「他の船ついてもな」

ジョーカーは停泊中の船を指さした。

「あれを奪おう」

指の示す先には海軍の船がとまっていた。

「正気か？」

エースの問いにジョーカーは笑顔で答えた。

「おれたち海賊だろ。海軍から奪つてなにが悪い」

「それもそうだ」

そして二人はすぐさま行動に移った。

船の上には三人の海兵が見張りをしていた。一人は船尾を見張り、

残りの二人は船首で雑談を交わしていた。

「ジョーカー、あんたは船尾の奴を頼む」

そう言つてエースは船首へと向かった。

ジョーカーは気づかれることなく海兵の後ろに回り込んだ。

海兵は気配に気づき後ろを振り返った。

「だ、だれだき」

海兵はいきなり口元を掴まれた。

ジョーカーはものすごい力で海兵を締め付け、ついに海兵のあごを砕いた。

海兵はあまりの恐怖に失禁した。

「汚いな。靴についたじゃないか」

ジョーカーは海兵の腰から剣を抜き取った。

「おれたちの航海が無事にいくために死んでくれ」

ジョーカーは剣を振り上げ、海兵に向かって下ろした。

だが、海兵の身体に傷は付かなかった。エースが止めたのだ。

「やる必要ないだろ」

エースはジョーカーを睨みつけた。

ジョーカーはふてくされた顔をしたが、エースに従った。

「出航の準備を頼む」

「はいよ船長」

素直に従い出航の準備をするジョーカーの背中を見ながら、エースはジョーカーに一抹の不安を覚えていた。

双子岬

リバースマウンテンを越え双子岬に到着した二人は、灯台守のクロツカスの自宅に招かれていた。だが、二人はなにやら険悪な雰囲気である。

「あの時おれにやらせとけばこんな事にはならなかったんだ」

「それは関係ないだろ」

「関係あるだろボケ」

「なんだと!？」

いまにも決闘を始め出しそうな二人の間に、料理を運んできたクロツカスが割って入った。

「それでも食べて少し落ち着かんか」

そう言ってクロツカスは二人の前に料理を並べた。

二人は出された料理を無言でがつつく。

「君たちにはラブーンが申し訳ないことをした」

クロツカスが謝るが、ジョーカーは聞いてないようなのでエースが答えた。

「もともと奪った船だから気にしないでくれ」

エースの言葉に安心したようだが、クロツカスはもう一度あたまを下げ謝罪した。

クロツカスがなにを謝罪しているかというところ、リバースマウンテンを越えて双子岬へ到着したときに舵取りに失敗しレッドラインに吠えていた巨大鯨のラブーンにぶつかり、船が大破したことだった。どちらかというところ、悪いのは、操船技術の無い二人なのだ。

「船を一隻しか持ってないから船はあげれないが、ほかの船がくるまで泊まっていてくれ」

二人はこの申し出を受け、しばらく世話になることにした。

クロツカスの世話になってから五日目。ついに一隻の船が岬を訪れた。その船は帆にドクロを掲げ灯台へ近づいてきた。

「きさまら、我々ナマコ海賊団に有り金と食料をよこせぶえあ」

船長とおぼしき人物は、ジョーカーによって一撃で倒された。

残った船員たちをジョーカーは睨みつけ言った。

「この船はおれたちが貰う。文句がある奴は前にでろ」

指をパキパキとならすジョーカーを前にして文句あるなんて言える者は居らず、全員がジョーカーの前に整列した。

「いい船だな」

遅れてエースが船に乗り込み感想をもらした。そして船員のほうへ歩み寄り言った。

「次の島に着いたら船は返すよ」

その言葉にジョーカーの顔は険しくなった。

「どういうことだいエース？」

「言っただままの意味だ。文句あるか？」

ジョーカーの顔はさらに険しくなり、ふうとため息をついた。

「わかったよ」

そしてジョーカーは船室へと入っていった。

「君らはうまくいってないのかい？」

クロツカスがエースに問いかけた。

「いや、うまくいってるよ」

エースが言うと、クロツカスはそうかと言ってポケットからある物をだし、エースに渡した。

「これはなんだい？」

「ログポースつてもんだ。これがないとグランドラインは渡れん」

「そうなのか」

エースは頭を下げ礼を言った。

「ありがとう。おれたちはもういくよ」

「元気でやれよ」

クロツカスはそう言ってエースと握手を交わし、船を下りて二人の船出を見送った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1232n/>

ONE PIECE ~ 第二の暴君 ~

2010年10月8日13時49分発行